

【論 説】

メンガー経済学の世界

山 崎 弘 之

目 次

1. ダーウィン進化論の淵源は経済学にあった
2. パースが見たダーウィン進化論
3. 全体論
4. メンガーの「公共の福祉」とハイエクの「自生的秩序」
5. 財の世界は客観の世界
6. 社会科学の客観性とは
7. 類型と方法論的個人主義
8. カール・ポランニーのメンガー解釈

1. ダーウィン進化論の淵源は経済学にあった

社会科学に進化論を述べるとお門違いと思われるかもしれない。なぜなら、「進化」を広辞苑で引くとダーウィンが出てきて、生物学を専らとしているからである。ただ進んでいくと、「社会」の項目でも書かれている、「生物における進化の観念を社会に適用した発展の観念。社会は同質のものから異質のものへ、未分化のものから分化したものへと進む。」とある。つまり生物学における進化をアナログア（類比）として社会科学に援用したとある。しかし、ハイエクが進化論を調べた限り全く逆である。ハイエクは述べている。「それ（進化論）は社会科学が生物学から借用した概念であるとする誤った信念である。事実はまさに逆で、もしチャールズ・ダーウィン（Darwin, C. R. 1809-1882）が主として社会科学から学んだ概念をうまく生物学に応用できていたら、その概念は生まれ故郷で相応の評価を受けていたはずである。」（かっこ内筆者）¹⁾ ダーウィンは社会科学から得た原理を生物学に正しく援用

メンガー経済学の世界（山崎）

しなかったということである²⁾。ハイエクは述べている。「私は、ダーウィンの進化の基本的な観念を経済学から得たと主張することさえ厭わぬであろう。」³⁾メンガー（Menger, C.）も述べている、自然科学者がダーウィンの理論を誤解している、と⁴⁾。同時に、天下の広辞苑は明らかに誤りを記していることになる。では、その元となるハイエクの言う、社会科学の進化論とはどのようなものか。

まずその前に、進化論に興味を持ったハイエクとその影響をハイエクに与えることとなった、メンガーの言説およびその出会いを述べてみよう。既述のように、ハイエクの父親は生物学者、そのため若い頃ダーウィンの進化論に触れる機会は十分にあったと思われる。また、一方でハイエクはギムナジウム（9年制の中高等学校）の第7年次（17才）、論理学や倫理学の授業でアリストテレス哲学に強く惹かれ、ある時「私は急に『倫理学』を研究するつもりだ」と宣言して、父親を驚かせた、と述懐している⁵⁾。そのアリストテレスは生物（生体メカニズム）をアナロギアとして哲学を打ち立てたのは周知の事実である⁶⁾。

つまり、彼らには生物学、つまり生体メカニズムをアナロギアとする共通項が流れていたと思われる⁷⁾。その後、ハイエクはメンガーの『国民経済学原理』（以下『原理』とする）に出会い、いたく感動し経済学への意志を固める⁸⁾。詳しく言えば進取究明に燃えていたこの時期アリストテレスの哲学とメンガーの経済学に出会い、マッハ（Mach, E.）の影響下心理学も捨てきれなかったけれども経済学に意志を固めたのである⁹⁾。いわば、メンガーの『原理』にもアリストテレスの哲学が流れていたことから、生物学と経済学、ダーウィンとメンガーとは進化という課題で括れるように思われる¹⁰⁾。それゆえ、ハイエクが経済学を進化と結びつけて議論するのももっともなことであった。

メンガーは『原理』の第1章5節で「人間の福祉増進の原因について」（第2版『一般理論経済学』第4章第6節「経済的な進歩」をも見よ。なお『一般理論経済学』は以下『理論』とする。）と題して、アダム・スミスの分業

論に批判を加えている¹¹⁾。それには未開種族の分業と発展を遂げた経済社会における分業との相違である。もとより、スミスの分業は（ピンの製造工程でかくも有名な話ではあるが）企業内分業だけではない、社会的分業をも視野に入れて、経済社会の飛躍的發展、福祉増進に分業が多大な貢献をなしている、というものである。つまり、人間社会は個人個人それぞれが異なる職業（分業）をもっているからこそ豊かになり、福祉が達成される、と。しかしメンガーはスミスの言説、分業が多大な貢献をなしてきたことを認めるが、もっと根本的なところに理由がある、と言う。スミスはそれに気づかなかった、と批判する。メンガーにしてみれば、スミスが捉えた分業の貢献は経済的發展という限定的な理由でしかなかった、と。では、メンガーは分業を通して何を見ていたのであろうか。

メンガーは述べている。

「オーストラリアのある種族の基本的にみて占取的な労働が、きわめて合目的に…成員のある人数は獵師として、他のある人数は漁師として活動し、さらにある人数はもっぱら野生の食用植物の占取に、女たちの一部は食事の用意に、一部は衣料づくりに従事している…。その上で…アダム・スミスが分業の進展の結果だとよんだような増進的作用を持つてあろうか、と問いかけてみよう。明らかにこの民族は、また他のどの民族もこのやり方[分業]によって従来どおり合目的に、またより効果的に行うことによってそもそも可能なかぎり、自分を改善するであろう。しかしながら、この改善は、経済的に進歩しつつある諸国民において実際に観察される改善とはきわめて異なっているであろう。したがって、分業はそれ自体では、進歩した社会の富裕の唯一の原因ではありえないのである。」¹²⁾

議論は企業内分業であるよりは社会的分業である。それには個人の合目的性をもって、労働の改善が必ず編み出される、と。しかしながら、この改善は明らかに現代（メンガーの生きた時代）と比較すると、そこには明らかな差異が見られる。その差異はどのようなものか。メンガーは続ける。

「人間の支配しうる享楽財がどんどん増加するのは分業だけの結果だけではない、のみならず…明白なのは、分業は人間の経済的進歩の最も重要な原因とみなすことは決してできず、むしろ正当に人類を野蛮と貧困から文化と福祉とを導く偉大な作用の要素の一つと考えられるにすぎない、…。」（修正訳およびルビは筆者）¹³⁾

この文章からではどこかトートロジーで、享楽財が享楽財を生む、そしてまた文化と福祉が文化と福祉をもたらしたと理解しかねない¹⁴⁾。しかしこれは文字通りそのように理解してもよい。いわば文化と福祉という社会を命題とした演繹、全体論が展開される。もとより、当の文化と福祉がどのようにもたらされたのが明らかではない。つまり理解しかねるところもある。袋小路から抜ける手立ては次のように述べられる。メンガーはさらに続けて言う。

「享楽財の発生は、因果法則を基礎とする点では以前と変わりがないが、人間の希望と欲望とにたいしてはもはや何らかの偶然的なものではなく、かえって（人間の）力の下におかれて、しかも自然法則（Naturgesetz）の画する範囲内で人間の目的に応じて規制される一つの過程である。」（かっこ内および修正訳筆者）¹⁵⁾

この文章でどうやらメンガーの主張の核心部分に入ったようである。人間が福祉の諸原因の認識が進歩し「需求にそれぞれ応じて、より遠い条件[高次財]にまで前進」する。それは「労働の組織の進歩および生産の技術の改善と協同」する人間の為せるワザである、と。そこには因果関係が存在する、と。そして、その因果関係は（第2版でも同様に述べられている¹⁶⁾）「自然法則の画する範囲内で人間の目的に応じて規制される一つの過程である。」と説明される。1版と2版は等しい説明をなしている。

この「自然法則」とは何であろうか。メンガーはどうしてもトートロジーの感が否めない。つまり、演繹で議論を進めている。重要なことは、スミスが分業を経験的に見ているのに対して、メンガーはその経験を通して主観に分析のメスを入れている。したがって、先ほどのトートロジーは主観分析に

入ったことを意味する。つまり「(人間の) 力の下におかれて」主体内のサイバネティックス、フィードバックが機能すると見るべきであろう。続けて、その主観は「画された限界の範囲内で人間の目的に従って制御される」のである。目的を持つ主観は諸主観として互いに制限を余儀なくされる。そこに「自然法則」が見いだされる。「自然法則」はまさに間主観で築かれる法則である。そしてそこに進歩、進化を見ているのである。文化と福祉に分業も一つの要素であるが、基本的な原因を探れば、「(人間の) 力の下」にある主観とその主観が織りなす諸主観が貢献していたのである。それが「自然法則」である。もとより言わずもがな、この自然法則は自然科学の法則、帰納法ではなく、演繹法から生まれるものである。これぞ経済社会の文化、福祉の進歩であり進化の原動力である。メンガーの言っていることは決して分かり易いものではないが、よく読めば理解される。

この演繹の構図をハイエクは次のように説明する。そしてこの因果関係をもたらす動力を進化と捉えて述べている。ハイエクは述べている。

「何百万人もの人間が作用し合い、周知の文明を発達させてきた、偉大な社会または開かれた社会では状況は一変する。経済学は、そうした状況が内包する『分業』を長い間強調してきた。しかし、経済学は、知識の分散化を、つまり、社会の各構成員は全員によって所有されている知識のほんの一部しかもちえないことを、したがって…無知であることを強調してこなかった。しかし、あらゆる進歩した文明のはっきりした特徴をなしているものは、ある一人の人がもちうるよりもはるかに多くの知識の活用であり、したがって、一人一人にとってはその大部分の決定因子のわからない一貫した構造の範囲内で各人が活動しているという事実である。」

「事実、一人の『文明』人は非常に無知かもしれず、多くの未開人よりも無知かもしれないが、それでも彼は自分の住む文明から多大の便益を得ていることであろう。」¹⁷⁾

メンガーの分業そしてスミス批判は説明が必ずしも十分でなかった、つまり、

メンガー経済学の世界（山崎）

現代経済が「需求に…応じてより遠い条件[高次財]にまで前進」しつつも、その統一のメカニズムを説明しきれなかった。ハイエクはそれを払拭して、主観と「偉大な社会」や「開かれた社会」に見いだした。主観は「偉大な社会」や「開かれた社会」の下で「人間の目的に応じて規制され」つつ、そこで福祉増進がはかれるのである。「偉大な社会」や「開かれた社会」は演繹と言う名の現にある構図であり、「人間の目的」に覆い被せねばならない形容である。それは全体論および一元論である。その中で主観は進化を遂げる。メンガーはこのような世界、演繹論すなわち経験論と主観論そして進化論で経済学を構築しようとした、と言えよう。

2. パースが見たダーウィン進化論

これらの前提を踏まえて、プラグマティズムの創始者・パース（Peirce, C. S.）のダーウィンの進化論の解釈を見てみよう。ダーウィンから直接引用しないということで孫引きの感否めない。しかし、それには理由がある。ハイエクが述べるように、そもそもダーウィンの進化論は社会科学が究めた言説を援用したものである。したがって、ダーウィンの言説を哲学者・パースの理解でむしろ真意が戻るというものであろう。

パースは周知のように、プラグマティズム（実用主義）の哲学者である。すなわち、彼は実利を求めた哲学者であった。そのプラグマティズム哲学はこれもよく知られたことであるが、カントの『純粹理性批判』の一節が動機になってプラグマティズムを創始したのである。彼の哲学はあくまでも哲学のための哲学ではなく、目的（福祉や幸福）達成のための哲学であった¹⁸⁾。その意味で経済学そしてここで論じるメンガー経済学に相通じるであろう。メンガーもまた調和や福祉そして文化を地平におく経済学者であったから¹⁹⁾。

パースはダーウィン進化論を次のように説明している。

「ダーウィンの理論が動物および植物の諸形態のそれらの環境に対する

適応の傾向を形成している真の原因を示していることはほとんど疑いない。その理論のきわめて顕著な特色は、個体に対して不利に作用する偶然的出来事も含めた個体の単なる偶発的変化が全くの不規則性に帰するのではなく、あるいは統計的恒常性にさえ帰するのではなく、いかにしてそれらの偶発的変化が目的に対する手段のよりよい適応に向けて連続的にかつ限りなく発展するようになるか、そのことを示しているところにある。」²⁰⁾

「ダーウィンの原理の定式では『適者生存』という言葉は個体の適者生存ではなく、類型 (types) の適者生存を意味しているということを言っておかねばならない。」(かっこ内筆者)²¹⁾

パースは別の箇所で「ダーウィンの『種の起源』は進歩にかんする経済学の見解を、動物的ならびに植物的な生命の全領域に拡大したものにすぎない。」(ルビは筆者)²²⁾とも述べている。パースのダーウィンからの読み取りは的中していた。その言説は社会科学と変わらないのである。要は、「類型」が「いかにして…偶発的変化が目的に対する手段のよりよい適応に向けて連続的にかつ限りなく発展するようになるか」である。

ここからメンガーに転移して議論を始めることができる。この「類型」は社会科学そして経済学においては人間主体と考えてよいであろう。「類型」が後に述べるように、メンガーの「一定種類の厳密に定型的な現象」²³⁾の主役を務めるものである。この「類型」(主体)がもつ目的がその適者生存に向け進化を引っ張るのである。換言すれば、「類型」は「偉大な社会」や「開かれた社会」で間主観として活動する主体である。

ハイエクも同様な議論を進めている(つまり、ハイエクの援助を借りてメンガーの議論を進めよう)。ハイエクは述べている。「進化というものは、進化の産物が経験するはずの必然的な段階や局面を支配し、将来の発展の予測を可能にする法則という意味での『進化の法則』とか、『歴史的発展の不可避的法則』のようなものとはなんの縁もないのである。」²⁴⁾もとより、特定の段階ないし局面の必然的継起を言明できるわけでもないのである²⁵⁾。

メンガー経済学の世界（山崎）

ハイエクはこの「類型」に抽象が宿り機能して進化が進むと見る。いわば、「類型」が間主観のなかで、つまり「類型」は（そしてハイエクが言うように）「個人間の相互関係を規制」し、「学習」して進む。それには抽象が弾力的に対応する。つまり、「自然法則」は具体的な法則ではなく、文化や福祉に向けた自生的な運動と見ることができよう。

ここで、自然科学と社会科学の決定的な相違を述べておく必要がある。進化は目的をもち「類型」と共に進む。その目的は自然科学であるかぎり、存在の意義は見出しようがない。ダーウィンの進化論は現代では多田富雄の『免疫の意味論』で語られよう。多田が到達した免疫の意味は「超システムとしての免疫」である。多田は述べている。「『自己』と『非自己』の識別能力は、環境に応じた可塑性を示す…。」「『自己』に適応し、『自己』に言及しながら、新たな『自己』というシステムを作り出す。この『自己』は、成立の過程で次々に変容する。」²⁶⁾ ここには確かな進化を確認する。そして、この「超システムとしての免疫」とは、ダーウィンが課題とした「類型」であろう。それにはある目的が含まれているに違いない、と。その目的とは生命（系統）の維持とか人類の維持であろう。これはこれで正しいであろう。しかし、それは仮説にすぎないであろうし、免疫の意味に目的論や存在論として迫れるわけでもない。確かに免疫には意味があろう、しかしその意味論に経験や実験で到達することはできない。自然科学の限界である。

ダーウィンは「類型」を社会科学から借りてきたのである。そのことにおいては少しも問題はない。しかし、自然科学者が「類型」を経験的に検証して自然に潜む奥義、目的を究めることはできない。ここに自然科学と社会科学とが根本的に異なるところである。自然科学にはないもの、それは社会科学においてはその「類型」が目的を含めて構築の対象となることである。ハイエクも文化的進化の理論と生物学的進化の理論は相違するとして述べている。「生物学的理論は、…獲得された特質の遺伝を排除するけれども、すべての文化的発展はその種の遺伝形質—個人間の相互関係を規制する、生得的でない学習されたルール—の形をした特質—に依拠している。」²⁷⁾ この「学習

されたルールの形をした特質」とは人間諸個人の合目的性を含意している。これは社会科学、経済学で避けて通れない、アプリアリなスタンスである。

これに気づいていたのがメンガーであり、ハイエクである。各個人はバラバラに目的を堅持し毎日を過ごしている。しかしそれは常に「意図せざる結果」に収束される。そこに間接を余儀なくされる。しかしその個人の目的なしには「類型」は作られない。個人目的は「類型」や社会的目的の契機になっている。そうであるが故に、社会科学も自然科学に劣らず客観化が可能であり、科学性を主張できる。後述するように、自然科学の対象化とは異なるものの、社会科学にも客観化、対象化が可能である。したがって「自然法則」が成立するのである。これに気づいたのもメンガーであり、ハイエクである。こうして、ただでさえ蓋然性の低さが問題になってきた社会科学、経済学はその懐疑性を払拭することが可能であろう。つまり、過去はあくまでも棄却の対象であり、未来は構築の対象である。客観化、対象化は未来を向いている。M. ウェーバーのように「理念」を据えることなく進む。それは未来に向けた進化を含意しているからである。いわば、メンガーやハイエクの進化は未来に向けた目的論的進化論と言えよう。

3. 全体論

既述のように、進化論は目的がキーワードであった。これは人間存在や生命の意義という全体論に関わらずにはおかなかった。そのことにおいて、自然科学者も社会科学者そして哲学者も同様であった。メンガーはドイツ歴史学派のシュモラーとの間で方法論を戦わせ『経済学の方法』を書いたが、それは歴史学派の方法がまさに自然科学の方法と何ら変わらないことを批判してのことであった。つまり、歴史学派の方法がすべての点で間違っていると批判したわけではない。メンガーは『経済学の方法』で述べている。

「具体的な形態での法や国民経済は一国民の全体生活の部分であり、全体的国民史と関連させてはじめて歴史的に理解できるものである。国民

メンガー経済学の世界（山崎）

経済の諸事実は歴史家によって、その構成にともに働いた物的・文化的要因の全体に帰せられなければならないということは当然のことであってなんの疑いの余地もありえない。」

「ただ理論的科学の本質とこうした科学の与える現象一般の理論的理解…の真の性質とを完全に誤認することから、多くの経済学者は誤って上述の、歴史と歴史的理解とに関係する観点をそのまま、すなわち、まったく機械的なやり方で国民経済現象の理論と理論的理解とに移植することとなったのである。」

「われわれは…以上の研究要請に…精密の方針をとりあげ…ついで現実主義の方針をとりあげて、論じる…。」

「現実の世界の個々の複雑な現象について…全体としてのそれらの全般的な理論的理解を独力で与えることのできるような理論はただの一つもない。…むしろいつも精密の科学が与えるにすぎない。」²⁸⁾

経済という現象はまずは国民経済として、つまり全体論、「物的・文化的要因の全体」として見なければならぬ。それは歴史的（つまり経験的）に見ることであり、それには同意する。しかし個人を機械的な要素、すなわち国民経済全体を構成する均一な単位と理解しては誤認もはなはだしい。経済学に全体論を纏めるような理論を見いだすことはできない。これには歴史学派に強く修正を迫るものである。さらにメンガーは続ける。

「『国民経済』の現象はけっして…直接的な生の…結果ではなくて、…無数の個別的努力のすべての合成果であり、…上記の擬制の観点から…理解されてはならない…。むしろ…実際に個別経済の諸努力の合成果として現れるままに、…理論的に理解されなければならない。」²⁹⁾

こうして、「合成果」を見いだす精密の方法、すなわち「個別的努力のすべての合成果」に寄与している個人に課題が向けられる。もとより、その全体は社会主義や全体主義の全体ではない。全体はあるべき姿としての全体であり、個人もまたあるべき姿としての個人でなければならない。そのために現実の経済をつぶさに見なければならぬ。個人が対象とするものは可能な限

り提示されねばならない。

このようなスタンスでメンガーは『原理』を上梓したのである。さらにその理論を充実すべく、その再版を誓ったのである。しかし周知の通り、その再版は纏まらなかったのである。メンガー・ジュニアが代わって纏めることとなったのである。したがって、2版の『理論』はメンガー自身が納得したものではない。

したがって、このような演繹の下で、メンガーはできる限りの質的にも量的にもより多彩な対象を想定しておかねばならないと感じたに違いない。今では現に捨てられた財や事象もまた復活するかもしれない。そのような配慮を至る所にちりばめたのが『原理』（2版を含む）である。その作業はくどいほど神経質に書かれている。その意味で、メンガーは異色の経済学者と言えよう。この神経質な内容は全体論であるが故に生じたものである。これはそのままミーゼスやハイエクに引き継がれたと言えよう。

ハイエクが「形式的な均衡分析の本来の内容である同義反復が、現実社会の因果関係についての何らかの知識を我々に与えてくれる命題となり得るのは、我々がこれらの形式的命題を、いかにして知識が獲得され、伝達されるかについての明瞭な叙述をもって内容付けすることができる場合においてのみである…。」³⁰⁾と述べたとき、経済という機構の背後あるものはアリストテレスの人間の共同存在という意識であった。アリストテレスは次のように述べている。

「物事は多くの意味である〔または存在する〕と言われるが、…そう言われるすべてのあるもの〔存在〕は、ある一つの原理との関係において存在（ある）と言われるのである。すなわち、そのあるものはそれ自らが実体なるがゆえにそう言われ、他のあるものは実体の限定〔属性〕なるがゆえに、またあるものは実体の道〔生成過程〕なるがゆえに、あるいは実体の消滅であり、あるいはその欠除であり、あるいはその性質であり、あるいは実体を作るものまたは産むものであるがゆえに、あるいはこのように実体との関連において言われるものどものこれら〔生成・消滅・欠除・性質・等々〕である

メンガー経済学の世界（山崎）

がゆえに、あるいはさらにこれらのうちのあるもの・または実体そのもの・否定であるがゆえに、そう言われるのである。」³¹⁾

この現象学的な相互存在、間主観の世界そしてこの、‘存在’が要請される世界、すなわち演繹の世界は経済の世界で際立って見いだせる。したがって、それが経済学の世界である。これはメンガーが基底にもっていた考え方であり、オーストリア学派経済学の根本思想である。この変化は国家を含む全体論で見えていかねばならない³²⁾。初版が『国民経済学原理』と書かれた「国民」はその意味で全体論を指している。

メンガー経済学の素材はこの全体論、演繹の要請を受けて展開されている。それを次に見ていこう。

全体論を支えるその1

メンガーは経済行為に「先慮」を強調する。もとより、経済行為の主観分析の一つである。つまり、経済に生きる者は過去よりは未来を見る、そして目論む。経済はすべてが将来を向いていると言って過言ではない。全体を見つめること、将来を見つめることを重視したところにメンガー経済学の特徴が伺えよう。「先慮」と全体論は経済に機能しているアプリオリな形式と言えよう。その意味で、まさにメンガーは現実主義者であった。

まず、メンガーは「ある物が財となるためには…それが財としての性質（Güterqualität）を獲得するためには、四つの前提がそろわねばならない。」そして、どれ一つ欠けても財とその性質を獲得することはできない、と言う。

- 「1 人間的欲望の認識、ないしは予想。
- 「2 物によって欲望の満足を生じさせるのに適した物の客観的な諸性質。
- 「3 このような適正の認識。
- 「4 この物を支配すること、すなわち、この物を人間の欲望の満足のために（たとえそれが将来の欲望であるとしても、また他の財の助力を得なければ満足がうみだされないとしても）用いることができるという関係がその物とわれわれとの間に成り立つこと。」³³⁾

続いて、メンガーはそれぞれの財の性質を失うケースを挙げる。1の対象財として「もはや発生しなくなった病気のための薬品」を挙げている。2は「腐敗した食料品や割れたコップ」等の財。3は「文化財が野蛮な民族の手中におちた場合」。4は「財が手の届かない海底深く沈んでしまったとき」と考えられる財。これらの説明から分かるように、財が遭遇する考えられるだけのケースを想定している。要は、財が遭遇する否定的な状況変化を想定してのこと、常に全体論に対処しようとしてのことである。

メンガーは言う。「ある物が人間の欲望の満足に役立つという適性を示すことができるのは、もっぱら、そのものの諸性質によってだけである。けれども効用性というものは、何ら物の客観的な性質ではなくて、（個体的もしくは種族的に）規定された事物の人間に対する関係にすぎない。」³⁴⁾と。決して物理的かつ科学的な財の性質が課題になるわけではないことを示す。もとより、その性質を決して無視しているわけではない。それを基礎としての財が時間的にも空間的にも将来どのように変化するか、つまり環境と主観の変化の分析である。

これは既に『原理』の冒頭（第1章の第1節）で「財の本質について」として述べられている、支配していくべき財の因果の法則を予期してのことである。しかも、その支配は「世界的連関の一環であり」として視野の広い世界で求めている。財は時間的にも空間的にも予測を含む全体論でそしてそれを受け止める人間との関係で展開される³⁵⁾。いわば、主観の分析は同時に諸主観に審査、吟味を提供すべく、全体論として想定されるであろう、財を網羅しようとしている。これを現象学的に言えば、ノエシス (Noesis) としての主観、志向的体験であり、一方ノエマ (Noema) としての財は志向的客観もしくは志向の対象と言うことができよう。実に哲学的分析がなされている、と言えよう。

次に財の「需求 (Bedarf)」である。メンガーは財の需要はいわゆる需要ではなく「需求」とする。「需求」とは「先慮が向けられる期間内の欲望を満足するに必要な財数量」³⁶⁾である、と。他方、厳密な財の需要を見極める

メンガー経済学の世界（山崎）

ために財数量の支配可能性を考える。この二つの視点から財の「需求」を議論する。いわば、人間は「需求」という欲望と財の支配という二つの思考で経済財に向かっていることになる。両方とも先慮的であるから推測である。このような単に需要としないで「需求」とし、さらに二段がまえで考えた理由は主観が財を合目的使用に最大の効果を得ようとする、人間のアプリオリな意識の分析のことである。

メンガーは以上をまとめて経済と財を定義する、「目的に向けられた人間の行為の総体を人間の経済と呼び、またこの行為がもつばら対象とする上述したような数量関係にある財を経済財と名付ける」³⁷⁾と。メンガーの叙述はしばしばトートロジーで読者を無視した説明に見える。どれも冗長でくどいほどの重複な説明で満ちている。そのくどさは財の「需求」は目的をもちつつも全体論としてかならずや修正を迫られる事前準備と理解した方がよい。メンガーは人間の心の不安定さによって支配可能な財数量に変化が生じる、有用性（財の属性）が失われたりする、と言うことを忘れなかった。同時に、人間はそうにならないよう努力をもおしまない、とも。

全体論を支えるその2

メンガーは「財の種類」と題して、確實財（wahre Güter）と不確實財（eingebidete Güter）を挙げている³⁸⁾。そして、メンガーはこれに注を付けて述べている。これらの区別は「倫理的な観点から捉えられてはならず、…経済学的観点からなされなければならない」と。その財の説明を次のようにしている。

「1. 実際には存在しない人間的欲望が誤って前提される場合。その種の不確實財とは、例えば実際にはまったく存在していない病気のために医薬品や、妖術や魔法を防ぐ手段や、偶像崇拜に用いられる道具・彫刻・建造物である。」

「2. 物に実際には属していない諸性質や諸作用がそれらの物に誤って着せられる場合。例えば、たいていの化粧品、護身術、文化程度の低い所

や未開人のもとで今日なお病人に与えられる多数の薬剤、媚薬、多数のいわゆる秘薬などがそうである。なぜなら、これらの物はすべて、これによって満たされるはずの人間の欲望を実際に満足させる能力はないからである。」

「3. 実際にはそうではない物が誤って支配可能であると考えられる場合。」³⁹⁾

そして、メンガーは言う、「民族の文化が進歩すればするほど、ことに人々が自己の本性と外界の物とそれとの関連について認識を深めれば深めるほど、确实財の数はますます増大し、不确实財の数は当然のようにますます減少する。経験的に言って、确实財の最も乏しい民族のもとで不确实財とみなしうる財の数が通例最大になるということは、真実の認識と人間の福祉との連関を示す並々ならぬ証拠である。」（一部修正訳）⁴⁰⁾ これは経済が進化の過程を踏んでいく、という動態およびありのままの現実（「倫理的な観点から捉えられてはならず」）、交換経済を網羅しようとしたことである。

このように経済に進歩を見る視点は、メンガーが全体論を時間として展開しようとしていることを意味している。もとより、その全体論を空間としても展開されねばなるまい。換言すれば、（必ずしもメンガーが進化を十分意識していたかどうかは定かではない、）経済に進化を見ていることになる。ハイエクはこれを受けて『法と立法と自由Ⅰ』および『致命的な思い上がり』でダーウィンの進化論を例にとりて、この進化を分析することとなったと思われる。

また、この确实財と不确实財の財の分類は、経済財と非経済財との分類と同様に需求に向け、できる限り財を網羅しようとする意図の表れと見ることができよう。何度となく繰り返される主張に、財はその性質や属性から財が生じるのではなく、われわれと関係構造から生まれるのであるから。その意味でアリストテレスの存在論（関係論）の中にあり、換言すれば、それは現象学的にノエマとノエシスの分析でもある。

4. メンガーの「公共の福祉」とハイエクの「自生的秩序」

ここで全体論の総括をしておく必要がある。メンガー経済学はスミスが持っていたように、予定調和の経済学であった。予定調和の目標を「公共の福祉」と言い換えたと言ってもよい。それらはともに経済学がアприオリに要請する地平である。換言すれば、メンガー経済学は全体論として「公共の福祉」にすべてが凝縮される、と言って過言ではない。ハイエクの全体論は言わずもがな、自生的秩序である。これらを比較検討しておくことに意義があろう。

メンガーが遺した著作、『原理』（メンガー・ジュニアが編纂した、その2版『理論』も含め）および『経済学の方法』（正確には『社会科学とくに経済学の方法に関する研究』）はいたるところに哲学を漂わせる内容であることは誰もが認めるところであろう。にも拘わらず、これまで哲学からメンガー経済学を解明することは必ずしもなされてこなかった。否、ほとんど解明されてこなかった、と思われる。筆者はすでにこのメンガーが秘めていた哲学はヒューム哲学とカント哲学に依存するに違いないと論じてきた⁴¹⁾。もとより、この示唆は、筆者の見解ではなく、ハイエクが『法と立法と自由』の「序章」で述べているところから来ている⁴²⁾。そして、ハイエクの言説はハイエクが述べる以上にほとんどがメンガーからの援用もしくはその発展に位置づけられるものと言って、過言ではない。では、ハイエクの功績は何か。それはメンガーの経済学に潜む哲学を体系的に掘り起こして見せたことである。

まず、ハイエクがメンガーを引き合いに出して論じているところを当たらねばならない。それは、ハイエクが社会科学の方法論を展開した『科学による反革命』に見出すことができる。ハイエクはメンガーの文章を引用しながら、次のように述べている。

「自生的に成長した制度は『有益』である。何故なら、これらの制度は

人間が一層の発展を遂げる際にその足場となって来た条件だったからである。—そしてこれらの制度によって人間は自ら行使する力を与えられたのである。人間は社会の中で『かれらが意図しない目的を常に促進している』という、アダム・スミスによって定式化された言い方は、たとえ科学主義的意識をもった人間の苛立ちの絶えざる根源となって来たとしても、そこには依然として社会科学の中心的問題が表明されているのである。スミスの百年後、そのスミスを超えて他のどんな著述家よりも明確にこの言い方の意味を説明したのはカール・メンガーである。かれはこう問題を提起したのであった。『公共の福祉に役立ち、またその進展にとってもっとも重要な諸制度は、その創設を目指す共通の意志が無くとも生成しうるが、このようなことがどうして可能なのか』ということとは依然として『社会科学の重大な、恐らく一番重大な問題なのである』と。』（ルビは筆者）⁴³⁾

社会を動かしている契機が個人の利益（価値意識）にあることは間違いない。そこには個人の功利主義がある。その利益は自生的に成長した制度では制約を受けつつ、かつ護られるという構図の中に置かれている。そして重要なことは、その構図は「意図せざる結果」という個人の価値意識からまずは離れるところから生じることに気づいてきた。いわば、経済学はこの社会に含意された、カントが言う「目的無き合目的性」の探求に進まねばならない。この課題をどの経済学者よりも早く気づき、明確にしたのがメンガーである、とハイエクは言う。

さらに、ハイエクはこのメンガーの叙述、『社会科学の重大な、恐らく一番重大な問題なのである』の部分に注を付け、次のように詳述している。

『ここに、われわれにとって注目すべき、恐らくもっとも注目すべき社会科学の問題が提起される。すなわち、公共の福祉に役立ち、その発展のためにもっとも意義のある制度が、その創設を志向する共同意志なしに如何に成立しうるか？』あいまいで、それでいて、すでに証明されているかのように用いられている『公共の福祉（Gemeinwohl）』という用

語の代わりに『人間の意識的・目的の達成にとって不可欠な条件に当たる諸制度』という言い方を仮にしてみたところで、このような『目的をもった全体』が形成され、保持される仕方というのは、社会理論の特殊な問題なのであって、それはちょうど生物体の存在と維持が生物学の問題であるのと同じである、と言っても過言ではない。」（かっこ内およびルビは筆者）⁴⁴⁾

ハイエクは経済学を生物学になぞらえ、すなわち両者をアナログアとして見ている。その骨子は「人間の意識的・目的の達成にとって不可欠な条件に当たる諸制度」、すなわち自生的秩序に従うという全体論は近世啓蒙哲学の人々、とりわけヒュームとカントがもっていた哲学的考察基盤であったのではないか。

メンガーはこの演繹的方法を誰か学んだのであろうか。明らかなことはバークから学んでいた。さらに、この演繹の淵源は（カントによれば）、法学にあった「事実問題と権利問題」⁴⁵⁾ に一つのルーツを見ることができる。それに結びつくように、メンガーはドイツ歴史学派の法学者・サヴィニーから学んでいた。

その後、ハイエクによって更なる渉獵がなされた。そして、ハイエクはスコットランド啓蒙思想家、アダム・ファーガソンの「諸国家は偶然に誕生したのであって、それは人間の行為の結果ではあるが、人間の設計の結果ではない」⁴⁶⁾ に辿り着いたのである。

したがって、あるべき姿の全体は個人にとって「意図せざる結果」とならざるを得ない。しかし、個人は諸個人を通して「公共の福祉」を確認し、享受する。同時に、それは個人と社会的諸制度は何らかの鞆帯によって結ばれていることを意味する。換言すれば、個人は諸個人として諸制度を創り出している個人である。メンガーは述べている。

「『知るということは諸原因を通じて知るということ。（“Scire est per causas scire.”）』だから、『国民経済』の現象、すなわちわれわれがこうした言葉で呼び慣れている、あの複雑な人間現象を理論的に理解しよう

とする人は、その真の要素、すなわち国民の中での諸単一経済にまでさかのぼり、前者（『国民経済』）が後者（「真の要素」）から組成される法則を研究することにつとめなければならない。」（修正訳とかつこ内筆者）⁴⁷⁾

つまり経済という現象はあくまでも真の要素、個人に出発点を求めて解明されねばならない、と言う。

それゆえ諸個人における個人とはどのような個人か、ということになる。全体論すなわち諸個人としての個人を見出さねばならない。まさに、個人は全体との関係、演繹論として求められる、換言すれば間主観において、もしくはパースペクティブ（遠近法主義）において捉えられることになる。これがハイエクがメンガーから得た方法論である。こうして、これまでメンガーの言説と言えば、高次財の存在理由を一次財に帰着せしめる「帰属の理論」、そしてその一次財を需求し、支配する消費者、すなわち個人に帰着させる「方法論的個人主義」が哲学的にも理解される。

それはメンガーの経済学の功績である。しかしメンガーは課題を残したまままでこの世を去った。それはこの「公共の福祉」の実現メカニズムである。それにはさらなる哲学的分析がなされねばならなかつた。メンガーは自らの手で『国民経済学原理』の第2版を上梓したかった。しかし、それを成し遂げられなかった理由はこの哲学的裏付けを得た経済学に漕ぎ着けなかつたからであろう。

もとより、それをハイエクは意識して自生的秩序に至った、と思われる。「公共の福祉」という、全体論はハイエクによって方法論的に自生的秩序としてあらためて問われることとなった。

5. 財の世界は客観の世界

メンガーが経済学の対象とした世界は既述のように、全体論の世界であった。その全体論の世界は客観として世界であった。それはヒュームの社会で

メンガー経済学の世界（山崎）

あり、そしてカントの「判断力」の世界でもあった。諸個人によって、社会が構築される世界であった。それはまたアリストテレスの「存在」の世界であった。個人は社会を通して、社会は個人を通して相互に否定される世界であった。その意味で、ヒュームの「開かれた集合」、カントの「パースペクティブ」の世界として見ることができよう。

まず、「需求」と財とに焦点を当てることから客観性を述べてみることにしよう。当然「開かれた集合」や「パースペクティブ」からメンガーの言う「需求」や財は通常経済学の教科書に扱われている定義に止まらない条件の広がりを見せる。

まず、「需求」である。メンガーは既述のように、需要を「需求」と言った。もとよりこの「需求」は需要とは異なる。メンガーは定義している、「『需求』という言葉は、ドイツ語ではある二重の意味をもっている。…一方では、一人の人間の欲望を完全に満足させるのに必要な財数量を、他方では一人の人間が消費すると予想される財数量を意味している。」⁴⁸⁾として、「需求」を「先行的配慮のおよぶ期間内」に必要なそして支配し得る財数量と定義する。欲望とその対象である財を「先行的配慮のおよぶ期間内」で需要に結びつけるのが「需求」である。需要と「需求」の相違は后者に主体の意向が加味されているところにある。これは財をあるがままの財と理解するのではなく、主体が意思する財としていることを意味する。したがって、主体の意向は「開かれた集合」や「パースペクティブ」の環境におかれねばなるまい。視点を財の側に移せば、財は「先行的配慮」と「支配し得る」によって時間と空間に広げられている。これは全体論を意識してのことである。

したがって、この「需求」やそれを満たす「財数量の確定にあたっては不確実性の契機を認めなくてはならない」⁴⁹⁾ことになる。しかし、メンガーは言う。

「経済活動を行う人々にとって需求を確認することが課題となる期間の幅が先にのびればのびるほど、当然にもそれだけその意義は大きくなる。しかしながら、将来期間におけるわれわれの欲望の満足を保証するため

に必要な財という意味でのわれわれの需求を確定することには、何ら原理的な困難があるわけではないということも、同時に確かである。将来期間におけるわれわれの第一次財にたいする需求は、…われわれがその需求充足に向けて先行的に配慮する活動をおこなうに際して一定の判断を下せるような量として現れる。」⁵⁰⁾

財の「需求」に楽観論が展開されている。では、この不確実性はどのような理由から払拭されるのであろうか。次の文章から引き出される。

メンガーは述べている。

「われわれがまず直接に持つのは、第一次財（Güter erster Ordnung）にたいする需求だけである。この需求が存在しない所では、高次財にたいする需求も、すなわち、間接的な財需求も生じえないことは、われわれにとって自明である。高次財にたいするわれわれの需求は、第一次財にたいするわれわれの（直接的な）需求に依存する。」（かっこ内は筆者）⁵¹⁾

何度も聞かされてきた、『原理』を貫く「帰属の理論」である。経済を動かす原動力は第一次財、すなわち個人が消費する消費財にある。オーストリア学派が基本に置く、主観主義の基本命題である。経済学の出発点はまずもって消費財にあり、というものである。しかし、同時にメンガーは高次財の存在意義をも述べている。ここに全体論が展開される。そして不確実性が払拭される。

「われわれの欲望の満足のために直接に財を用いるという可能性が、物が財としての性質を得るための必須の前提なのでは決してなく、むしろ多数の事物が、それが人間の欲望の満足と多少とも間接的な目的関連にあることだけからその財としての性質を引き出しているということであった。」

「高次財が財としての性質をもつかどうかは、それが生産に役立つ低次財の財としての性質の有無に依存するのである。低次財の財としての性質は高次財（その産出に役立つ生産財）の財として性質の原因なのであ

て、結果ではない。」

「経済学者たちは、物が財であるのはそれが財から生産されているからであると考える傾向がある。しかしながら、…実際にはまさしくその逆こそが真実である。すなわち、生産物が財となるがゆえに、諸財が生産のために用いられるのである。」⁵²⁾

まず、財の性質（財の素材ではない、経済機構における属性）を見極めよう。財の財たる所以は第一次財すなわち消費財にある。経済財は第一義的に消費に帰する。同時にその一次財は無数の高次財によってつくられていることを理解する。その生産メカニズムはあくまでも人間の目的（どのような消費財が必要か）に向けた構造なのである。つまり、「ある物が財となるためには、それは人間の支配力をこえたところにあるのではない。しかしながら、それが特定の人の権利上の支配力のうちにあるということは、いわゆる自由財やまた孤立した経済について考えてみるだけですでに、物財としての性質の前提ではないことがわかる。財にたいする主観的な権利ではなく財そのものが、財としての性質を基礎づける関係にたつのである。」⁵³⁾と。

したがって、経済はある目的の下に機能している。つまり目的は諸個人によって展開される。それは全体論である。経済目的は個人から見て（ハイエクで言えば）「意図独立的（the purpose-independent）」⁵⁴⁾にあり、（カントの言葉で言えば）「目的無き合目的」⁵⁵⁾である。いわば、財が財としてあるのは諸個人が財として認めるから財である。財に貫かれる抽象性である。それは低次財にも高次財にも貫かれている。換言すれば、財は全体論に付されているから財である。ここに演繹が展開されている。財は財としての出発点を個人にもっている（そうでなければ財は成立しない）。同時に企業もまたその財の企画をする。しかし、それは経済という合目的性に叶ったものでなければならぬ。経済には自然な判断がしっかりと含意されている。財は財であるが故に財である、とは以上の命題を意味している。

経済機構に見いだす「目的無き合目的性」を考えてみよう。経済発展を遂げる各国に一時期「鉄は国家なり。」が語られた。鉄を需要することは国力

の指標になる。その国力は「目的無き合目的性」を意味している。これが現代では国の威信の反映はレアメタルに移っているかもしれないが。要は、鉄という財をもって国家経済の質と規模が語られるのである。鉄の性質にその原因すべてがあるのであるが、需要量の多さに、国家の規模そして質までが語られるのである。鉄の需要の多さと鉄の性質もいれて、鉄と国家に抽象的な共通概念化がなされたのである。低次財の必要性が大元にあるが、高次財の需要量をもって世界戦略まで語られる。鉄を通して概念はまさに国家戦略、世界戦略まで移っている。これは一つの「意図独立的」であり、「目的無き合目的性」である。

ここでカントの第三批判（『判断力批判』）のアンチノミー理論を援用するにしくはない。まずその一つ。これはまさに全体論である。こうして経済に常に付きまとう不確実性は全体論によって払拭される。これは企業が立っている立場と見たりしてはいけない。個人にも、企業にも目的論が展開される。もとより確固たる目的は分からないけれども、その目的を論じなければならぬ。つまり、全体論は「不定の概念」を持つしかない。需求する個人は確かに全体論の立場にたって「先慮的な配慮」をする。しかし、明らかな目的や全体論が即開かれているわけではない。ここにカントが展開した、アンチノミーが展開されている。個人や企業は概念を持ち、目的を描く、しかしそれが直接全体論の目的に結びつくわけではない。経済という機構が目的を決める。つまり「不定の概念」に見通しを付ける。これらが財の世界であり、経済の世界である。これは「概念をもつ」という命題と「不定の概念」をもつというアンチノミーがともに真として成立している。

このメンガーの議論はさらにもう一つのアンチノミー理論が有効に働く。そのアンチノミーは「物質的なものの産出がすべて機械的法則に従う。」とするテーゼと「それらの中には機械的法則によっては判定できないものがある。」とするアンチテーゼである。これらはともに真とみなされる。つまり、経済は規定的判断力の客観的原理ではなく、調和や秩序の合目的性をどのように判定するか、すなわち反省的判断力によって判断される。つまり、行く

メンガー経済学の世界（山崎）

べき目的は一つであり、客観的である。絶えざる反省を以て臨む。いわば、カント哲学のアンチノミー理論は経済という機構を通して具体的に説明できるのではないか。要は「意図独立的」、「目的無き合目的性」をもってメンガーの財の世界が説明されるのである。こうして経済機構はアリストテレスの存在論によって解かれるのであるが、それはヒュームの「開かれた集合」やカントの「目的無き合目的性」という個人と経済（合体）の媒介項・諸個人によってよりせんめい闡明になる。

6. 社会科学の客観性とは

メンガーの『経済学の方法』は周知のように、ドイツ歴史学派のシュモラーとの方法論の論争から書き上げられたものである。シュモラーは歴史（経験）から得られる客観的な法則によって、社会科学、経済学を樹立させようとしていた。しかし、社会科学のような蓋然性の低い科学は科学として立ちようがない。経済という機構が有機体であることにおいてはメンガーもシュモラーも共有していた。しかし、シュモラーはその有機体を構成する個人（原子）が定型として扱ってきた。したがって、経済現象を一面的な集合主義で扱ってきた、とメンガーは論難する。ちょうどケインズが古典派（新古典派）の原子論的個人を批判したように。メンガーは述べている。経済は「国民そのものの直接的な生の発現、『経済する国民』の直接の結果ではなくて、国民のなかでの無数の個別経済的努力のすべての合成果であり、…擬制（Fiktion）の観点からは理論的に理解されない。』⁵⁶⁾のである。有機体である社会制度は「無反省な仕方」で成立し、既述のように「その創設をもくろむ共同意志無しに」（かっこ内筆者）⁵⁷⁾発生した、と。シュモラーは個人をまさに自然科学と同様に擬制して扱ったのである。メンガーはこのシュモラーの方法を経験的現実主義の歴史的科学と言い、自らの方法を精密のかつ理論的科学と言った。方法論的に言えば、前者は帰納法であり、後者は演繹法と言うことができよう。

このような記述からすると、メンガーは経験主義や個人（原子）論から乖離しているように見える。しかしそうではない。メンガーこそ経験主義であり、現実主義であり、そして主観主義である。メンガーならではの理論が精密に展開される。では、メンガーにはどのような経験主義、現実主義そして主観主義（個人主義）が展開されるのであろうか。

メンガーはドイツ歴史学派の影響の下にただけに、誤解を受けるようなそしてしばしば読者を混乱させるような叙述をしている。メンガーは『理論』で言う。

「われわれは…人間の経済の複雑な諸現象を、しっかりした観察によって行きつきうる最も単純な諸要素に還元し、その諸要素にそれらの性質にふさわしい度量をあたえ、そしてこの度量を保持しながら、どのようにして複雑な経済現象がそれらの諸要素から合法的に展開して来るかを再度研究することに努力した。…この研究方法は、自然科学において[一般に]通用するようになり、きわめて大きな成果をもたらしたために、誤って自然科学的方法とも名づけられてはいるが、これは[実際には]あらゆる経験科学に共通するものであり、より正しくは経験的方法と名づけられるべきものである。ところでこの区別が重要であるのは、どのような方法も、それが適用される知識領域の本性によってそれなりに特別な性格を得るのであるから、われわれの科学にあっては自然科学的方法というものは適切ではない…。」⁵⁸⁾

「…経済的交換のおこなわれるための条件、その際価格形成はどのような限界内で生じうるか等々、これらのすべては、ちょうど化学の法則が実験化学者の意志から独立しているように、私の意志から独立している。…理論的経済学と経済活動を行う人の実際活動との関係は、化学と実験化学者の活動との関係等と何ら異なるところはない。」（かつこ内筆者）⁵⁹⁾

またこのような叙述は『経済学の方法』にも散見される。メンガー自らの精密的方法として述べている。

「理論的真理にたいするただ一つの認識原則は、ただ一回だけでも観察されたことは、厳密に同じ事実的条件のもとでは、絶えず繰り返し現象とならなければならない、という命題、または本質上は同じ事であるが一定種類の厳密に定型的な現象には同じ事情のもとではいつでも同じ一定の他の種類の厳密に定型的な現象が、しかもわれわれの思考法則からしてまさに必然的に、契機しなければならない、という命題である。」⁶⁰⁾

冒頭の論述は経済学は自然科学の方針と異なると言いながら、経済学と経済活動を化学と実験化学者と同様に扱っている。これはまさに自然科学も信じる斉一性の原理である。これだけを見ると自然科学と社会科学の区別が付けられているようで付けられていない感が誰にも訪れる。しかし、よく読めば分かる。この斉一性の原理は全体論、演繹に適応されている。法則を見いだすために述べられているのではない。つまり「定型」は定型的な個人ではなく「定型的な現象」なのである。これから分かるように経験主義から離れているわけではない。さらに疑問が解かれねばならない。

メンガーの立っている立場そして経済という対象をどのように捉えているのであろうか。まず、経済や諸制度は個人から見て「無反省な仕方」で成立し、「その創設をもくろむ共同意志無しに」成立した、のである。ハイエクで言えば、経済や諸制度は個人が諸個人を通して創り出されているのであるが、個人から見て「意図せざる結果」である。これは経済や諸制度は個人から見て直接繋がらない諸個人が決める世界、現象である。

このメンガーの方法はM. ウェーバーの方法と比較しておこう。ウェーバーの「目的合理性」は個人が直接に全体論に与する手立てになっている。しかしそれには無理がある。ハイエクもこのウェーバー方法を論難している⁶¹⁾。現象は直接個人に繋がらないから、客観化が可能なのである。いわば、経済という世界は全体論として「無反省な仕方」で成立したのである。この「無反省な仕方」とは経験は過去で棄却の対象であり、それをステップとして未来を開くへ根柢になろう。それは構築という現在から未来に向けた世界である。歴史学派もつばら歴史という過去の経験から法則を得るのとは根本的に

異なるスタンスを踏んでいる。もとより、客観のプロセスを経なければならぬが故に、化学（自然科学）の対象となる一薬品と同様に扱えることとなる。メンガーの斉一性による表現はドイツ歴史学派を意識してのことであろう、それだけに「定型的な現象」を一定な「類型」の集合として理解されてはならない。ハイエクはこのような誤解を恐れて、自然科学的な表現はとらなかつた。

したがって、メンガーの世界は経済学者と化学者はこと対象において立場は同じである、と。その現象の世界に斉一性の原理が適用されてしかるべきである。したがって、筆者はこのメンガーの斉一性をヒュームの「一度で十分の原理」と見た⁶²⁾。もとより、メンガーにヒュームがどれだけ根付いていたかは疑問である。ただ言えることは、調和や秩序は一度経験すれば事足りる。その全体論を堅持し構築するだけである。メンガーの斉一性はその立場で叙述された。メンガーにはドイツ精神が強く息づいていた。それだけに、メンガーの斉一性は一見して矛盾のように見える。しかしそうではないことが分かる。

考えてみると、この社会的なもしくは諸個人が決める現象の世界は客観の世界であり、ヒュームが見届けてきた社会であり、カントが第三批判で展開した判断力の世界である。そして、その客観の世界は人間が自然全体の中におかれるから可能なのであり、人間の欲望そして需求は「われわれの本性の全面にわたる調和的発展の要件をより適切に表現する」⁶³⁾契機なのである。しかしながら、その調和は現実ではなく、たとえア prioriに全体論に立てたとしても、具体的な対象に収束を見いだすことは至難の業であろう。しかし経済は調和や秩序そして福祉を自生的に要請する。それがメンガーが信じていたドイツの精神、ア prioriな世界ではなかろうか。その調和や秩序を求めて、メンガーやハイエクは方法論を通じて現実に隠れて潜む当為の個人を掘り起こそうとしたのである。ハイエクが法を立法による法ではなく、発見する法を当為の法としたように⁶⁴⁾。その意味で、社会科学の斉一性は期待される法則でわれわれが希求するものである。そして「無反省な

仕方」で存在する、客観的な経済現象に気づいたことは非常に重要なことである。次にそれを支える類型を論じてみよう。

7. 類型と方法論的個人主義

メンガーはパークの言説をも踏襲していた。既述のように、数多くの制度は「…その創設を目指す意識的な共同意志の所産ではなくて、歴史的発展の無反省な結果である…」さらに進んで、国民経済の現象は「無数の努力の意図されない合成果であって…それらを生む個別的要因に還元し…その要素から組成される法則を研究することによってはじめて、精密的にこれ（法則）を獲得することができる。」（かっこ内および一部修正訳は筆者）⁶⁴つまり、「共同意志の所産」ではなく「無数の努力の意図されない合成果」であるから、「要素から組成される法則」を究めれば、すなわち諸個人が参加する全体論で進めれば法則は獲得される、と言う。社会科学は自然科学に比較して当初から演繹的構図の下で進めねばならないのである。つまり福祉や調和そして秩序に向けた目的論であり、全体論をもち構築に励むことができる。

こうして、社会学者が一致していることは法や制度をつくるに当たって、人間の共同作業で進まなければならない。それは意志の下ではなく意見の下で進めなければならない。ここに方法論的個人主義がある。メンガーはこのために「精密な法則」、「定型的な現象」⁶⁵というタームで説明をした。しかしながら、当然のことこれらのタームは自然科学で言われるような具体的な実証から生まれた概念ではない。メンガーは自然科学の自然法則と社会科学の自然法則を区別について注を施して述べている。

「対立はただ理論的研究の現実主義的方針（自然科学）と精密の方針（社会科学）とのあいだに、…あるにすぎない。けっして精密ではない自然科学（例えば生理学、気象学など）があると反対に、けっして自然科学ではない精密科学（例えば純粋経済学）がある。……それは実際には精密的・倫理的科学である。…社会科学一般、とくに理論経済学におい

ての自然科学的方法について語ることも同じようにまちがいである。…理論経済学の方法は経験的であるか、精密的であるが、…けっして『自然科学的』であることはできない。」（かっこ内、一部修正訳筆者）⁶⁶⁾

では、分かり易く言って自然科学と社会科学とはどのように相違するのであろうか。メンガーは確かに社会科学を「精密的な法則」と呼んだり「定型的な現象」と呼んだりして自然科学と区別したが。

既述のように、メンガーはこの「定型的な現象」をヒュームの「一度で十分の原理」にしたがって、斉一性として説明した。それだけにある法則性が得られるもの、絞れるものとした。そして「この原則は現象の本質についてばかりではなく、程度についてもあてはまる」とする。そしてそれを「批判的な悟性」にかけると可能である、と言うのである⁶⁷⁾。これが「精密的な法則」や「定型的な現象」を編み出す方法である。つまり自然科学と社会科学の対立は現象の対立である。後者は前者に比して「定型的な現象」を編み出さねばならない。

これは既述のパーズがダーウィンの進化論を評して述べた「類型」と同義であろう。いわば、「類型」はダーウィンなら「適者生存」であろうが、社会科学なら間主観によって何らかの凝縮が可能であろうというのである。ハイエクはこの「類型」をヒュームの「開かれた集合」にならって幅をもたせて「自生的秩序」として括っている。

メンガーは続けて述べている。（ベーコンの経験的・現実主義を批判しつつ）「こうした法則は経験的現実主義の観点のもとではなく、理論的研究が上記の認識原則の諸前提を満足させることによってはじめて獲得できるものである、ことは明らかである。」⁶⁸⁾ この方法で「質的に厳密に定型な現象に到達する」⁶⁹⁾と言う。そしてその核心は個人個人がもつ認識、道徳そして判断に委ねられるであろう。それらを含意した個人をメンガーは「要素」と言った。そしてメンガーは倫理的世界の領域でも、上記の理論的研究方針は古くからすぐれた代表者を見いだすことができる、と付け加えた。そしてこうした方針にすでに倫理的現象の独特な性質にふさわしい「形式」⁷⁰⁾にしたので

メンガー経済学の世界（山崎）

ある。しかしながら、同時に「この考えの実現は前途遼遠」であると述べるに止まるのである。哲学的裏付けを得よう。

これらの内容から、メンガーが考えていた方法は合理論と経験主義が互いに譲り合わねばならない世界を考えていたのであろう。換言すれば、合理論と経験主義の互いの欠点を補った道筋を歩むことになる。それは既に触れてきたように、カント哲学である。同時にハイエクはマッハの影響下にあつて動物生体に合理論のメカニズムに見出している（『感覚秩序』）。なぜなら、ヒュームやハイエクが獲得したアприオリの部分を動物生体に生起する自然な能力は生得的能力として経験から学び取ることができたからである。いわば、合理論の正しさを得ることができたのである。つまり、この合理論に行き着いたのは徹底した現実主義、経験あつてのことである。したがって、いわゆる合理論ではなく経験的合理論である。しかし、既述のように多田の「超システムとしての免疫」のように、目的論はそれからは出ない。これは社会科学そして哲学の分野に委ねねばならない。それがメンガーやハイエクに課せられた課題でもあつた⁷¹⁾。

この経緯で見ると、ハイエクが述べてきたように、進化論（「目的を持った類型」）は既にスコットランドの哲学者たちによって始められていたのである。いわば、進化論の起源はスコットランド啓蒙主義（ハチソンやファーガソン等）を出発点として、アイルランド生まれの政治学者（美学者）・パークとドイツ歴史法学者・サヴィニーを経由してメンガーに至つたのである⁷²⁾。その萌芽をメンガーは既に持っていたと言えよう。要は、進化論は自然科学の領域の話ではなく、社会科学者もしくは哲学者が出発させたのである。

8. カール・ポランニーのメンガー解釈

ここで、カール・ポランニー（Polanyi, K.）のメンガー経済学の解釈を論じてみよう。メンガーが言いたかつたことに一つの解釈を与えたからである。

ポランニーは、メンガー経済学の第2版『理論』は初版の『原理』と比較して解明が進んで新たな言説が述べられた、というのである。当時（1970年代）彼は経済人類学を打ち立てて一世を風靡した。これにメンガーの第2版が何ほどかの貢献をした、ということになったからである。しかし、本当にメンガーの第2版に新たな言説が加えられたのであろうか。筆者の見解を述べてみたい。

ポランニーは述べている。少々長い文章であるが三箇所引用する。

「この第2版は、『原理』[初版]が分析の対象としていた交換あるいは市場経済を一方の側におき、非市場あるいは『おくれた』経済を他方の側において、その相違をつぶさにさし示している。メンガーは、そうした『おくれた』経済を表す言葉を数種類使用している。」

「遺稿版（2版）…は、四つの完全に仕上げられた新しい章を含んでいた。少なくともこのうちひとつは、この分野における同時代の学者たちの心を悩ませていた定義と方法論にかんする諸問題にとって理論的に最も重要なものである。メンガーが説明したところによれば、経済にはふたつの『基本的な方向』があって、ひとつは手段の不十分なことから生じる経済化の方向であるが、もうひとつは、『テクノ・エコノミック』と彼が呼ぶところの方向で、手段の十分、不十分にはかかわりなく、生産の物理的必要性からくるものであった。」

そして、ポランニーはこれら二つの方向に囚われない「経済活動に従事する（Wirtschaftend）」という経済の「実体」をメンガーの第2版から読み取ることができるとしている。それを「おくれた」経済に、メンガーは見出ししている、と。しかしながら新古典派経済学を始め現代経済学は希少性や市場性を議論の中心にすえ、この経済の「実体」も見えなくしてしまった、というのである。ポランニーはその指摘を以下のメンガーの文章に見ている。

「私が、人間の経済のとりうるふたつの方向、すなわち技術的方向と経済化への方向との基本的なものとして指摘するのは、この理由によるのである。たとえ現実の経済においてさきのふたつの節で示されたこの二

メンガー経済学の世界（山崎）

方向が、ひとつのルール [傍点, ポランニー] としていっしょに生じて
もそして、実際にはほとんど [傍点, ポランニー] 別々に見いだされる
ことはないとしても、やはりこのふたつは本質的に異なるそして互いに
独立した源泉から [傍点, ポランニー] 湧き出てくるものなのである。
経済活動のいくつかの分野では、ふたつは実際に別個に生じる。そして
また、想像可能といえるいくつかのタイプの経済においては、実際、ど
ちらかがきまって他方を伴うことなしに現れるということがありうる。
…人間の経済がとろうとするこのふたつの方向は、互いに依存しあっ
ているのではない。両者ともに本質的であり基本的である。それらが現実
の経済においてきまって結びついて現れるのは、ただそのおのおのの発
生原因となる諸要因がほぼ [傍点, ポランニー] 例外なしにたまたま一
致しているという事情によるだけである。]⁷³⁾

そして、ポランニーは「メンガーのこの基本的な事実に関する議論は忘れ去
られてしまった。」⁷⁴⁾と嘆く。ロビンズもハイエクもこの2版に加えられた
箇所を問題にしなかった、と。ポランニーは批判を加える。「第2版の草稿
は『断片的で系統立っていない』ものとかたずけることによって、メンガー
没後の遺稿版を経済学者たちのまじめな関心からわきへそらすのに手を貸
すこととなったのである。『とにかく、…メンガー晩年の著作の成果は失わ
れたものと見なされなければならない』とハイエク教授は結論を下した。」⁷⁵⁾
と。しかし、このハイエクに対する批判・嘆きは正しいものであろうか。

筆者にとって、このポランニーの見解は正しいものと思われたい。まず、
メンガーの経済学の基本的姿勢は既に述べてきたように、全体論そして間主
観主義の哲学の中で経済を捉えようとしている。その言説はいたるところに
(冗長と言えほど発見される) 散見される。

この二つの方向が全く異なる源泉から生じているから分離している、とポ
ランニーは読み取る。しかしそうだろうか、経済行為は常に一つである。そ
の経済行為は既述のように、功利主義に基づく価値意識に契機をもつ。つま
り「おくれた」経済すなわち「手段の不十分なことから生じる経済化」であ

ろうと「テクノ・エコノミック」であろうと価値意識に基づいている。メンガーは価値意識の契機が全体論としてどのように止揚されるかを分析しているのである。それを受けて、ハイエクは経済の「実体」に自生的秩序を見出したのである。ポランニーはこれに気づいていないように思われる。ポランニーにはメンガー解釈にあたって哲学に触れることはない。メンガー経済学を読む者は誰もが哲学の片鱗を感じるし、哲学をかじった者ならば現象学を感じない者はいないであろう。それほどまでに哲学に関わりを持たねば解けない課題に付きまといられるのである。

ポランニーの言い分を続けよう。メンガーは「非市場あるいは『おくれた』経済を他方の側において、その相違点をつぶさに示している。」⁷⁶⁾そしてメンガーはこの遅れていることを強調して数種類の単語を使用している、と。そのドイツの語彙を並べる⁷⁷⁾。しかし、メンガーにとってその語彙の強調は別のところに意味があるのである。繰り返すように、それは筆者の理解に誤りがなければ、やはり全体論としての用意であろう。そして「技術的方向」と「経済化」との相違の中に進化を見ているのである。未開の種族の合理性では「公共の福祉」をまだ見届けることはできない。しかし現代の社会的分業にはその合理性から「公共の福祉」を実現しているのではないか、と。それは進化である。

もとより、ポランニーがメンガーの全体論を看過しているわけではない⁷⁸⁾。ただ、ポランニーのメンガー解釈が「技術的事象と経済化」の分析に限定されていないか、それではメンガーの中心的議論、全体性や間主観の構造に総合を読みとれない。換言すれば、既述のように哲学めいた論調をもつメンガーに対して、ポランニーは哲学の乏しさを感じるのは筆者だけではないはずである。高橋正立が述べるように、ポランニーは「メンガーを無理に自分の図式の中にはめ込もうとしているように見える。」⁷⁹⁾その点、ハイエクは哲学に深さと幅の広さをもって臨み、メンガーが踏み込むことのできなかったところまで踏み込んで肉付けを行った。その意味で、「ハイエクに至っては第2版の草稿は『断片的で系統立っていない』ものとかたづけらるることに

メンガー経済学の世界（山崎）

よって、メンガー没後の遺稿版を経済学者たちのまじめな関心からわきへそらすのに手を貸すこととなったのである。」は全くあたらない、ただポランニーの思いこみでしかない。とにかく、ハイエクはメンガーの言説に古代哲学にまで及んで深みと広がりがあることを読み取り、その足跡を調べ直したのである。

むしろ、ハイエクが第2版を無視したと理解したポランニーには、逆にメンガー経済学の分析と総合が不徹底に終わったと言わざるをえない。対照的に、ハイエクほど経済学という社会科学に哲学的なメスを入れ、かつ他の社会科学にも及ぶ根本（ポランニーの「実体」）に踏み込んだ経済学者は他にいないと言えよう。この点で比較すれば、ポランニーのメンガー理解は我田引水のように見える。もし、ポランニーの経済人類学が現代の経済市場は未開種族から見て、特殊化されたもの、形式化されたものと理解したとしても、同様にいやそれ以上にハイエクの言説は市場経済を破壊に導くものと見てきたのである。ミーゼスやハイエクにとって、市場はいわゆる市場ではなくカタラクシーでなければならなかったから。

注

- 1) *LLL1*, p. 23. (『法と立法と自由 I』33頁)
- 2) スティーブン・クレスゲ (Stephen Kresge) は述べている。「ハイエクは、二つのキーポイントで、ダーウィン理論から離れている。自生的秩序の形成は、(個体の突然変異によるのではなく) グループ淘汰によるのであり、それゆえ獲得形質は伝達可能なはずだ、と彼は言うのである。」*HH*, pp. 33. (島津格訳『ハイエク、ハイエクを語る』に所収, 257頁)
- 3) Hayek, F. A., *The Fatal Conceit The Errors of Socialism*, Edited by W. W. Bartley III *The Collected Works of F. A. Hayek Vol. 1*, 1989, p. 24. (渡部幹雄訳『致命的な思いあがり』ハイエク全集 II-1, 春秋社, 2009年, 30頁)
- 4) *UMS*, S. 127. (『経済学の方法』121頁) 既にメンガーによって、ダーウィンの理論は自然科学的な数学的抽象化では理解できないことが指摘されている。
- 5) *HH*, p. 47. (同書, 17頁)
- 6) 出 隆『訳者解説』を見よ。(アリストテレス『形而上学(下)』岩波文庫に所収, 429頁) アリストテレスの「目的観が…とくに生物学研究によって強められ合

理化された」ことは周知の通りである。

- 7) 「こうした展開（超個人的なパターン）は経済学のみならず生物学においてもただちに明らかである。」（かっこ内は筆者）、Hayek, F. A. *Ibid.*, p. 15.（『致命的な思いあがり』18頁）を見よ。
- 8) *HH*, p. 48.（同書、19頁）ハイエクは述べている。この本は「実に魅惑的で満足を与えてくれる本」である、と。
- 9) *HH*, pp. 47–48.（島津格訳『ハイエク、ハイエクを語る』17–19頁）ハイエクはこの時期心理学を専攻するか経済学を専攻するか、大変迷った時期がある。以上の内容から、自然科学的なタッチで精神を研究対象とすればまずは心理学を志望するのは当然である。それを経済学に向けたのはメンガーの『原理』の魅力であった。
- 10) もとより、生物学と経済学とを単にアナログアとして、前者から後者を類推するというものにはならない。これについてはあらためてメンガーの議論を含め論じることとしたい。
- 11) *GV*, S. 26f.（『原理』24頁）、Menger, C., *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, Mit einem Geleitwort von Richard Schuller Aus dem Nachlass Herausgegeben von Karl Menger, Neudruck der 2. Auflage Wien 1923, Scientia Verlage Aalen, S. 96.（八木紀一郎・中村友太郎・中島芳郎訳『一般理論経済学』、みすず書房、148頁）この第2版では第4章第6節「経済的進歩」で述べられている。
- 12) Menger, C., *Ibid.*, S. 85.（『理論』147頁）、さらに *GV*, S. 26f.（『原理』25頁）にも同様の既述が見られる。
- 13) *GV*, S. 28.（『原理』25–26頁）
- 14) ハイエクも同様に述べている。「文明を発展させたのは、…進化を方向付けたのはわれわれが精神と呼ぶものではなく、むしろ相ともなって発展ないし進化した精神と文化なのである。」Hayek, F. A. *Ibid.*, p. 22.（『致命的な思いあがり』28頁）
- 15) *GV*, S. 28.（『原理』25頁）
- 16) Menger, C., *Ibid.*, S. 96.（『理論』148頁）
- 17) *LLL1*, p. 14.（『法と立法と自由I』22–23頁）
- 18) パースはカント研究者でもある。カントの次の一節である。「感性が我々に奨めるところの目的を達成するために我々の自由な行状に対する実用的規則（*pragmatische Gesetze*）を与え得るだけであって、アプリアリに規定された純粋な道徳的法則を与えることはできない。」（かっこ内筆者）*KrV*, S. 828.（篠田英雄訳『純粋理性批判（下）』92–94頁）
- 19) *UMS*, S. 40f.（『経済学の方法』48–49頁）、現にパースのダーウィン解釈からメンガーの難解な「厳密な定型現象（*streng typische Erscheinung*）、厳密な定型

メンガー経済学の世界（山崎）

の現象形態（streng typische Ercheinungsformen）」を理解する手立てを得ることができたからである。

- 20) Peirce, C. S., *Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol. 1, Principles of Philosophy, Vol. V, Pragmatism and Pragmaticism, Vol. VI, Scientific Metaphysics*, ed by C. Hartshorne and P. Weiss (Harward University Press, 1935), p. 214. (米盛裕二編訳『パース著作集 1「現象学」, 勁草書房, 82 頁)
- 21) Peirce, C. S., *Ibid.*, p. 217. (同書, 85 頁)
- 22) *LLL1*, p. 153. (『法と立法と自由 I』195–196 頁) この引用はハイエクがパースから得たものである。Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol. 6, *Evolutionary love* (『世界の名著 48』中央公論社, 1968 年, 「パース」に所収, 山下正男訳『進化の三様式』195 頁)
- 23) *UMS*, S. 40. (『経済学の方法』48 頁)
- 24) Hayek, F. A. *Ibid.*, p. 26. (『致命的な思いあがり』32 頁)
- 25) *LLL1*, p. 23. (『法と立法と自由 I』34 頁)
- 26) 多田富雄『免疫の意味論』, 青土社 1993 年, 104 頁
- 27) Hayek, F. A. *Ibid.*, p. 25. (『致命的な思いあがり』31 頁)
- 28) *UMS*, S. 63f. (『経済学の方法』69 頁)
- 29) *UMS*, S. 87. (『経済学の方法』89 頁)
- 30) *IEO*, p. 33. (嘉治元郎／嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』47 頁)
- 31) 出 隆訳・アリストテレス『形而上学 (上)』, 岩波文庫, 113 頁
- 32) *UMS*, S. 267. (『経済学の方法』248–251 頁) メンガーは『経済学の方法』で「国家という現象は本源的な, 人間の存在とともに与えられているものであるというアリストテレスに帰せられている見解について」と前置きして, 「けっして人間の国家形成をめざす意図の結果ではなくて, 自然的な衝動の結果であるということ, …。したがって国家自体は…自然的産物である」と述べている。
- 33) Menger, C., *Ibid.*, S. 11., *GV*, S. 3. (『理論』41 頁) および (『原理』5 頁)
- 34) Menger, C., *Ibid.*, S. 10. (『理論』注(*) 39–40 頁)
- 35) 財はわれわれの欲望を満足させる物が財であるが, その財は (メンガーは引用している), アリストテレスが述べるところの「人間の生命および福祉に対する手段を財と名付ける。」と。GV, S. 2. (『原理』4 頁)
- 36) *GV*, S. 34. (『原理』31 頁)
- 37) *GV*, S. 53. (『原理』46–47 頁)
- 38) 八木／中村／中島訳では wahre Güter を真実財と eingebidete Güter を擬制財と訳している, しかし筆者には真実であるかどうかや擬制には別な経済学的専門性のある語彙があるので確実財や不確実財と訳し直した。Meger, C., *Ibid.*, S. 16. (『理論』48 頁)

- 39) Meger, C., *Ibid.*, S. 16f. (『理論』48頁)
- 40) Menger, C., *Ibid.*, S. 17. (『理論』48-49頁)
- 41) 厳密に言って、メンガーはヒュームとカントをどれくらい読んでいたのかは分からない。その意味で、秘めていたと言うことは正しくないかもしれない。しかしメンガーの言説は自ずとヒュームとカントに引きつけられる、と理解する。
- 42) *LLL1*, p. 6. (『法と立法と自由 I』13-14頁)
- 43) *CRS*, pp. 146-147. (佐藤茂行訳『科学による反革命』木鐸社, 115頁)
- 44) *CRS*, p. 147. (『科学による反革命』120頁), *UMS*, S. 163. (『経済学の方法』150-151頁)を参照。
- 45) *KrV*, S. 116f. (篠田英雄訳『純粹理性批判 (上)』162頁)
- 46) *IEO*, p. 7. (嘉治元郎・嘉治佐代訳『真の個人主義と偽の個人主義』春秋社, 8-9頁)
- 47) *UMS*, S. 87. (『経済学の方法』89頁)
- 48) *GV*, S. 34. Anmerken*) (『原理』32頁)
- 49) Menger, C., *Ibid.*, S. 39. (『理論』77頁)
- 50) Menger, C., *Ibid.*, S. 39. (『理論』77頁)
- 51) Menger, C., *Ibid.*, S. 33. (『理論』69頁)
- 52) Menger, C., *Ibid.*, S. 27. (『理論』61頁)
- 53) Menger, C., *Ibid.*, S. 13. (『理論』43頁)
- 54) *LLL1*, pp. 81-82. (矢島鈞次/水吉俊彦訳『法と立法と自由 I』108頁), この「the purpose-independent」が第2版の訳では「目的独立的」(110頁)と訳されている。
- 55) カントの第三批判(『判断力批判』)に「目的無き合目的性」のくだりをしばしば発見する、その中でこのメンガー叙述により接近できるくだりを挙げる。「自然の賛嘆(Bewunderung)が加わる。それは、自然の美しい諸産物について、たんに偶然によってではなく、いわば意図的に、配置にしたがって技術として、また目的のない合目的性として自分を示す自然の賛嘆である。」(かっこ内は筆者)、この文章の中で「意図的に、配置にしたがった技術として」はスミスの「見えざる手」を思い起こさせる。*KU*, S. 301. (牧野英二訳『判断力批判』191頁)
- 56) *UMS*, S. 87. (『経済学の方法』89頁)
- 57) *UMS*, S. 163. (『経済学の方法』150-151頁)
- 58) *GV*, Zweite Auflage, S. XX. (『理論』22頁)
- 59) *GV*, Zweite Auflage, S. XXI. (『理論』24頁)
- 60) *UMS*, S. 40. (『経済学の方法』48頁)
- 61) *LLL1*, p. 58. (『法と立法と自由 I』77頁)
- 62) 山崎弘之『ハイエク・自生的秩序の研究』, 成文堂, 2006年60-64頁
- 63) Menger, C., *Ibid.*, S. 4. (『理論』32頁の注)
- 64) *LLL1*, p. 84. (『法と立法と自由 I』109-110頁)

メンガー経済学の世界（山崎）

- 65) *UMS*, S. 183. (『経済学の方法』167頁)
- 66) *UMS*, S. 39. (『経済学の方法』47頁)
- 67) *UMS*, S. 39. Anm. 18 (『経済学の方法』47-48頁)
- 68) *UMS*, S. 40. (『経済学の方法』48頁)
- 69) *UMS*, S. 41. (『経済学の方法』49頁)
- 70) *UMS*, S. 41. (『経済学の方法』49頁)
- 71) *UMS*, S. 43. (『経済学の方法』51頁)
- 72) それはメンガーが『経済学の方法』の冒頭で語っているように、彼の頭にはあくまでもスミスに始まる経済学が課題であった。と同時に思想的にはドイツ精神であった。メンガーは述べている。「政治経済学もまたドイツ精神の目的を自覚した協力をかくことはできない。ドイツ精神を正しい軌道の上に連れ戻すために貢献すること、これが本書がひたすら追求する課題であった。」と。*UMS*, S. XXII. (『経済学の方法』15頁)
- 73) Polanyi, K., pp. 22-23. *The Livelihood of Man* (玉野井芳郎／栗本慎一郎訳『人間の経済Ⅰ』岩波書店、1980年、65-66頁)
- 74) Polanyi, K., *Ibid.*, p. 23. (同書、66頁)
- 75) Polanyi, K., *Ibid.*, p. 23. (同書、66頁) これについては *Carl Menger Gesammelte Werke*, Band I, Hayek, F. A., *Einleitung*, S. XXXI. (経済学部研究室訳『カール・メンガー評伝』, 法政大学経済学部「経済志林」, 第9巻第1号(昭和10年12月25日)に所収、74頁)を参照。
- 76) Polanyi, K., *Ibid.*, p. 22. (同書、64頁)
- 77) Polanyi, K., *Ibid.*, p. 22. (同書、64頁), ポランニーは三つの単語 *zuruckgeblieben*, *unzivilisiert*, *unentwickelt* を挙げている。
- 78) Polanyi, K., *Ibid.*, p. 34. (同書、86頁)「もし、人間の物的な生存が、単なるつかの間の因果関係連鎖の結果にすぎないものであるとしたならば、一時間または空間における特定の位置(すなわち、統一性と安定性)をもたず、関係を定める不変の点(すなわち、構造)をもたず、全体にかかわる特定の行動様式(すなわち、機能)をもたず、社会的な目標によって影響を受ける方法(すなわち、政策の適切さ)をもたなかったならば—それは人間の経済の威厳と重要性をけっして得ることができなかったであろう。統一性と安定性、構造と機能、歴史と政策の諸特徴は、制度的な法衣をとおして経済にもたらされるのである。」
- 79) 高橋正立『「経済とは何か」: ポラーニ対ハイエク』, 京都大学経済論叢 Vol. 138, No. 3~4 (1986年9月10日)に所収, (111)7頁